

今回は備中櫓の外観について検討しました。今回はその内装についてです。

前々回に備中櫓が御殿の一部として使用され、内装もそれにふさわしい御殿風で、「唐紙」の襖が使用されていたことを指摘しました。今回は、より詳しく見ていきたいと思ひます。



備中櫓平面図(津山城資料編から)

これは文化5年(1808)に描かれた備中櫓の平面図です。備中櫓だけでなく、本丸全体が非常に正確に描かれていることがわかっています。この絵図を手がかりに、備中櫓の内装を検討します。

絵図を詳細に見ると、襖の部分ほぼすべてに「唐紙」あるいは「カラカミ」という注記が認められます。そのため、備中櫓の建具はすべて唐紙が使用されていたことが推定できます。

ところで、この図面の本丸表御殿の部屋には、「虎之間」「紫陽花之間」などと書き込みがあり、それぞれ描かれた障壁画にちなんで部屋の名前がつけられていたことが推定されます。ところが備中櫓の部屋にはそのような障壁画の画題と思われるような部屋の名前の記載はなく、「御座間」「御次」「御茶席」としか書かれていません。どうやら備中櫓には障壁画は描かれてなかった

津山城百聞録

55 津山城備中櫓5の内装

ようです。

それでは備中櫓の内部の壁はどのようなものだったのでしょうか？

その前に、絵図の記載から備中櫓の中にあるそれぞれの部屋の格式を考えます。まず1階の西半分は部屋の名前の記載が一切ありません。次に1階東側には「御座間」「御次」「御茶席」などの名前のつけられた部屋が集中しています。また「御座間」には床や違い棚の設備も整っています。さらに、2階部分は部屋の名前こそつけられてないものの、もっとも格式が高いとされている「御上段」が設けられています。これらを整理すると「御上段」を持つ2階、部屋に名前がついている1階東側、何も記載のない1階西側、という順番で部屋に格式の差があることが絵図から認められます。

話を壁の仕上げに戻しますが、結論からすると内部の壁の仕上げは不明であると言わざるを得ません。しかしながら先に見た部屋の格式を考えると、当然それぞれの部屋の格式ごとに壁の仕上げが異なっていたことは十分に考えられます。そのため今回の復元整備では壁の仕上げを漆喰塗りあるいは板壁、および唐紙として部屋の格式に応じた差をつけています。

さらに同様に唐紙を使用すると部屋の間にも格式の差があり、「御上段」を持つの方がより格式が高いと推定されます。そのため、唐紙には森家の家紋をあしらひ、唐紙には武家に一般的な文様を使用することで格式の差を示すことにしています。

この仕上げは確実な史料に基づくものではありませんが、備中櫓の中にあるそれぞれの部屋の格式を示すためにさまざまな角度から検討し、もっとも可能性の高いものを採用しています。

大にいきましよう。(郁)

広報創刊時の津山のようすを紙面からひとつ。「松や杉からありがとう」という言葉をこ

編集後記

今月の納税

市県民税3期
国民健康保険料4期
介護保険料5期
納期限：11月1日(月)

ひとの動き

(9月1日現在)
人口 90,224人(前月比+22)
男 43,048人(同+35)
女 47,176人(同13)
世帯数 35,162世帯(同+3)

8月中の異動数

出生 78人、死亡 51人
転入 283人、転出 288人

10月
2004

編集・発行 津山市企画部行政広報室
〒708-8501岡山県津山市山北520
☎0868-23-2111(代) 32-2029(直通) ☎0868-25-0263
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
津山市ホームページ http://www.city.tsuyama.okayama.jp/
(PDFファイルで全紙面を掲載しています)
発行日 毎月10日
印刷 株式会社 廣陽本社

